
天地

ネットワーク テーブル 453号

発行：天地シニアネットワーク：2017・7・31

T E N T I T O D A Y			1
会員の広場	<俳句と落語><井伊家菩提寺「豪徳寺」> <オオバンの成長記録・写真><寛ちゃん先生>		2
連載作品			7
講演録	「60年安保闘争と高度成長時代の幕開け」(3)	加藤 幹夫	7
随 想	天のわざ、地のほまれ—地球を測れ、宇宙をはかれ 30. 温度と熱	伊那 闊歩	10
随 想	歴史文化論の試み(1) 森 有正のこと	尾関 陽四	13
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語(26) 洛中洛外3・東寺(その2)	大竹 漢洲	16
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		18
事務局			18

T E N T I T O D A Y

暑中見舞い申し上げます

いつもご支援ありがとうございます。夏もこれからが本番、どうぞ健康に十分留意され、夏をつつがなく乗り切ってください。

夏の甲子園、各地の出場校がほぼ決まったようです。清宮選手の早稲田実業は出場を逃しましたが、各地にもスター選手が多数いるようで、大会が楽しみです。早稲田実業の決勝戦には、神宮球場にプロ顔負けの3万人が集まったとのことですから、プロへ行くのか進学するのかが大いに注目されます。大学スポーツ界の人気、実力が低下し、財政面でどこも苦しい。仮に早稲田に進学すると、6大学の各校とも野球以外の部もプラスの影響があるようです。プロに行かず、大学にと願っている人は多いはずです。

今月初めに傘寿の旧友数人で会食した折に、「これまで見ていると、政権が国内で窮地に立ちそうになると、北朝鮮がミサイルを打ち上げる」という笑い話がありました。

先週始めから国会の集中審議、政権側には厳しく守勢一方でしたが、その最中に、北朝鮮が発射準備をしているらしいとのニュースが流れましたので、注目していましたところ、28日の午前中に防衛大臣辞任の表明があり、夜

に突如 I C B Mが発射されました。偶然の一致か、首をかしげています。

会員の広場

大学出て入社した時の上司、岩淵さんが「句集・楽土」を出され送ってくれました。趣味豊富で絵画もたしなまれる。句集に在ったエッセーと、寄席がらみ、作者紹介につながりそうな句を勝手に選び、掲載させていただきました。

俳句と落語 岩淵 彰

句作りの愉しさは眼前の事物に触発されつつ過ぎし日のあれこれと向き合うことだろう。時には意識下の記憶が蘇り一句に投影されてくる。その時空に遊ぶことを覚えて20余年経った。俳句を高校、大学仲間、ビジネス仲間と同好会的に楽しんだが、13年前「遠嶺」主宰小沢克己氏の一文に共鳴して初めて結社に入会した。7年前主宰の急逝で「遠嶺」は廃刊、現在はその流れをくむ結社「爽樹」（川口 襄代表）に在籍している。

我々は今の時代に生きて俳句を詠んでいる。自然は何百何千年不変だが人間は時代とともに変容してきた。時代に生きている己を見失うことなく、自然の森羅万象（景）と人の喜怒哀楽（情）の文字表現として俳句を楽しむ時、私自身はより人間に心が向くように思われる。

世に俳諧味という。本来人間は心にユーモアを秘めて日常を過ごし人と接している。人間味—ヒューマン—ユーモアである。俳句をあまり生真面目に考えたくない。諧味のある文学世界を自分なりに広げたいと思う。そして語らない部分にこそ詩の真があるのだろう。心地よい韻文のリズムと余白を大切にしたい。

落語を見続けて70年近い。文楽、志ん生、円生らの昭和の黄金時代がたまらなく懐かしいのだが、俳句と落語この二つ根っこで何処か通じている。扇子一本会話だけで成り立つ落語に余計な説明は無用だ。場面は聴き手それぞれの頭の中に生まれる。言ってみれば演者と聴き手の共作なのである。だから面白い。

落語で最も大切な「間」は切れ字などに代表される俳句の「間」と同一と言ってよい。とことん削がれた一語の持つ広がりや深遠な世界を作者と選者で共に楽しむ。作者の意図が受け止められない場合は悲しく時には反省も必要であろう。しかし受け手の感性で確り受け止められて作品は初めて完成するのである。夾雑物を排し、場面転換の妙、粹、淡白、艶、諧味など情（人）の味わい豊かな世界を楽しみたい。落語好きが俳句に取りつかれたのも自然の成り行きと納得している。

旅は好きでよく出かけるがいつも無計画のぶらり旅である。方向だけは決めても宿、時刻等は敢えて決めないことにしている。行きあたりばったりが新鮮なのでこれは俳句にも通じるように思われるのである。

とにかく新しいものに出会いたい。束縛のない自由な時間を楽しみたい。永六輔の「その先の路地を曲ってみる。それが旅です」を地で行っている。八ヶ岳南麓の草庵を拠点に嘗て疎開地であった信州方面がとくに気に入っている。佳いく句が出来るわけではないが、俳句を道連れに楽しさは倍加する。

時折海外にも行くが、これもノースケジュールである。半日カフェの椅子でぼんやりしたり句を作ったり。とにかく生来の束縛嫌いなのである。

浅草の初湯初席初屋台

初席や銀杏返しの音曲師

裂帛の気合独楽五十年

春塵や隙間僅かな寄席文字

生きのびて今年の三社祭かな

草笛を吹き合ひし日は饑じかり

蚊遣して昭和の話ばかりなり

艶麗な薔薇大輪を疎む日も

ひとつだけ聴きたきことも墓洗ふ

路地裏へすぐ曲る癖十二月

雲水と一礼交す春田かな

峰八つ一岳となり霞みけり

ぬきん出て寒満月の東大寺

年の瀬やピエロの缶へユーロ

ギャルソンは身を翻す若葉風

焼栗に一心不乱パリジェンヌ

井伊家菩提寺「豪徳寺」 喜多川貞男

平成29年7月12日

6月末のある晴れた夏日の日に、東京は小田急線豪徳寺駅から歩いていくばくもないところにある井伊家菩提寺の「豪徳寺」を訪ねてみました。結構広大な境内には、本堂や三重の塔があって、ひっそりと静かな雰囲気は世田谷区のただ中とは思えないほどでした。その日の何人かの若い女性の訪問者は、この寺が「招き猫」で知られているらしく、昨今の猫チームにあやかっの訪問「客」と知れました。境内の一角には「招き猫」の供養所があって、招き猫（人形）がごまんと葬られているのでした。

しかし、肝心の井伊家の墓所はといえはこの寺を入れて左手の奥にかなりの敷地を占めてひっそりとあるのですが、訪れる人もあまりないようで、清閑としていました。

近江国(滋賀県)の彦根の殿様だった井伊家の墓所が、なぜ世田谷区豪徳寺にあるかといえ、井伊家の江戸での領地が世田谷区のこの地にあつて、そこにあつた豪徳寺なる寺が井伊家の江戸での菩提寺になつて代々の殿様が分骨されたということです。臨済宗だつたのが、現在は曹洞宗だといひます。

翻つて浜松市の私の住家の地元では、NHKの大河ドラマも後半に入つて結構視聴率もまあまあの具合らしく、当地の区役所の別館を急遽「大河ドラマ館」に仕立てて観光客を呼び寄せています。井伊直虎なる女城主は実在したかどうか異論もあるところで、遺跡などはまったくありませんから急拵えの「大河ドラマ館」にNHKの物語の材料なるものを詰め込んで、観光客を接待しているつもりなのです。入館料600円は少し高いと思いますが、観光客はどこへも行き先はありませんから入館してみるしかないということでしょうか。浜松市の苦肉の策の経営かと思ひきやNHKの経営とか。入館料が高いのはドラマが終るまでの1年で元手を回収しなければとの苦心の策でしょうね。

7月9日に放送された「気賀を我が手に」の気賀なる地名を「きが」と呼んで放送してありますが、本当は「けが」と読むのが正しいのです。ただし、地元でも「けが」と読めば「怪我」と紛らわしく縁起でもない「きが」と読むことに修正したのは昭和の時代になってからです。そして気賀の地がドラマの舞台となる戦国時代に浜名湖奥の港湾の町だつたなんて事実はなかつたと思ひます。架空のドラマなんだから、それはそれでよいではないかと言へばそれまで。しかし地元人としては、複雑な気持ちです。ドラマに頻繁に出る祝田(ほうだ)村と都田村は実在して、江戸時代の村の石高はそれぞれ900石と1.600石なんですね。この女城主の井伊さんが納めていた領地は、江戸時代には井伊家は近江国の彦根へ栄転しましたからその後を近藤さんという旗本が治める所となつて幕末まで続いたなんてこと、忘れてるかもしれませぬ。近藤家は三河国(愛知県)の出で、徳川家康とともにこの地(遠江国)に来たのですが、地元出身の井伊家中興の祖・井伊直政の部下として各地を転戦して活躍したようです。

オオバンの成長記録

千代島弘毅

幼鳥の短い間に大きく変身する姿をご覧ください

 <p>オオバン 愛のささやき</p>	 <p>(2)</p>	 <p>(3)</p>
 <p>2017521</p> <p>(4) 親子とは見えない顔 とクチバシ</p>	 <p>(5) コブハクチョウと遭遇 子供達は初めての経験</p>	 <p>(6) 顔の赤みが消えて きた</p>
 <p>オオバンの親子</p> <p>(7) 体は親の大きさに近 く、首の前には白が残る</p>	 <p>201774</p> <p>(8) 青年の雰囲気</p>	<p>撮影：2017年 5月～</p>

天地シニアを応援してくださる橘さん、ご自身のシニアライフを柏市生涯現役促進協議会のセカンドライフデビュー物語に寄稿6月1日号に掲載されていると教えてくれました。シニアライフの一端、良いお話なので、紹介させていただきます。

現役の頃は、全国有数のホテルチェーンの営業マンとして「切った貼ったの生活」を札幌から那覇までの、全国有名都市で経験、多くの実績、人脈も作りました。定年後、数年は小金も有り、遊んでいました。その頃、ぼんやりと考えた事で、それは「青少年の悲惨な事件について、純粋な天使の心を持って平等に生まれてきた子供達はどの時期に、家庭内暴力で親を殺したり、怖い犯罪を犯す様に至ったのか？」でした。自分達の幼い頃では、考えられない事件ばかりです。「一体何がいけないのか？」

私には、それを知ってみたい気持ちが、心の奥の方に残っていました。結論は、矢張り幼少時の子供達への「家庭での愛」「世間の愛」の不足だと気が付きました。

生まれて初めての、園庭清掃による園児との交流は、一言で言い表せずと、その懸念を吹っ飛ばす「楽しい」の一言につきました。園児達との触れ合いに「若さ」と「元気」を貰います。

大人に成ってくると、「こんな事を発言したら不味いかな？」の懸念が出るのですが、これについては、園児達は全くの「無防備」です。何でも思った通りに口に出します。本当に、大人では思いもつかぬ、楽しい言動に幾らも出会います。

その中で、特に「心が通じ合った、思い出深い園児だった子」との思い出話ですが、卒園した年の4月中旬頃に「寛ちゃん先生ですか？」と、30歳半ばの健康そうな綺麗な女性が、その子を連れて作業中の私の目の前に現れ、突然「私がこの子の母親です」と言われました。

この時の模様を「園児だった頃の様には、互いに息が詰まり、意識しすぎて、喋れなかった」と久留米市で開業医をされている親友の奥さんに話しましたら、「まるで、初恋の人に会った時みたい！」と表現されました。彼女は「その子はお母さんに、ちゃんと幼稚園での出来事を、話しているのですね？立派なお母さんですよ！」と、言われました。

この年に成りますと、誰もが体験することですが、誰が亡くなったとか、誰が入院したとかの寂しい話が多くなるのですが、園児達との仕事中の会話では、大人同士では考えもつかない世界が発生致します。これが、とても「楽しい」のです。なんと言っても「若さ」と「元気」を時としては「感動」も貰います。

現役の頃では、「対予算、対予算」でそれは仕方の無い事でしたが・・・

定年後は、環境も変わり、新しく「仕事を通じての喜び」を体験出来、私の「老後のドラマ」は「心豊かなドラマ」と成りました。これは、幼稚園の理事長他のスタッフが、長年の努力で育んだ園全体の底辺で流れ伝わる、園児達への「愛」に起因するかと思っています。

矢張り老後に「仕事に従事する」事は、「健康が第一条件」では有りますが、精神的にも、健康を維持するにも、大変重要な事と改めて思います。具体的に、仕事のある日は、朝5時に起きて、朝の7時半から11時半迄の4時間

勤務致します。園庭は大きな樹木と季節の花に囲まれて広いのですが、この勤務が適度な運動ですので帰宅して昼食そして、ぐっすり昼寝です。

「柏市生涯現役促進協議会」のチラシを拝見して、素直に思うことがあります。「家でゴロゴロしても？仕事はしたいが？」と、働く場所を御希望されている方に敢えて、申し上げたい事が御座います。

逆に、一方では、その様な老人を、熱心に探し求めて居られる機関も柏市にも有ると言う事です。最後に、たった一言「働く事は楽しいです」

連載作品

「60年安保闘争と高度成長時代の幕開け」(3)

加藤幹夫

忘れられない学恩から

種瀬ゼミナールに所属して、種瀬 茂先生(1925-1986)のご指導でマルクス「資本論」第一部を読む。

資本論から何を学んだか。

「方法論」

資本主義社会の基本的構成要素を「商品」とし、商品—商品の交換過程—貨幣—貨幣の資本への転化—資本制的生産—というように、きっちり論理的・歴史的に段階を踏んで資本主義の仕組みを解明。資本主義社会ではヒトとヒトとの関係が、商品というモノとモノとの交換関係に置き換わる。(会社に入ってから種々の困難な課題に直面した時、その問題についてまずその生成の歴史を辿ってみる、そして一番基本的な要因を探りあてて、そこから問題の性格を解きほごして解決策を探ることに心がけた。マルクスから学んだことが役に立った。)

「労働価値説」

「富の源泉は労働にある」というアダム・スミス以来の説を発展させた。

労働者が売っているのは労働ではなくて実は商品としての労働力であるという論を展開。労働力の価値=賃金は、その再生産のための費用、すなわち生計費の水準で決まる。労働力の商品としての特殊性は、生産現場に投入すれば、その価値以上の価値を生み出すことが出来ることで、これが剰余価値であり、資本家の利潤の源泉となる。この過程をマルクスは「搾取」と呼んだ。

資本家は労働力の有効利用のために手作業を自動機械に置き換える等の手段により、生産性の向上をはかる。これにより増加する剰余価値は相対的(特別)剰余価値と呼ばれ、これが合理化の誘因となる。

この過程を簡単なモデルで例示すると：

日給1万円の労働者が布製のバッグを一日10個生産して、市場で一個2千円で売られたとする。資本家は2万円の収入を得る。材料費等5千円を差し引いた5千円が剰余価値（絶対的）。

資本家は手動ミシンを導入。生産が15個になり、収入が3万円になり、これから材料費等7千500円、資本費2千500円を差し引いた1万円が剰余価値となる。増加分5千円が相対的剰余価値。

同じことは他の同業資本家も進めるので競争で価格はいずれ低下するだろう。他の資本家に先んじて次の合理化（例えば自動シシンの導入）を行い、価格下落に先立って商品を市場に提供して、それ以前の高価格で売り抜こうという方法が取られる。この過程を繰り返すことが資本主義の発展の原動力となる。

中山伊知郎先生（1898-1980）の「経済原論」は看板授業であり経済学部は必修だが他学部の学生の履修者も多く100人前後は受講していた。月曜日の1時限だった。そこで一計を案じて、日曜日の夜に先生のお宅にお電話を差し上げて「安保条約改定について学生に訴えたいので授業を10分程早めに切り上げていただけないか」とお願いしたのだ。

今にして思えば随分失礼なことをしたものだと思うが、先生は「分かった」とのご返事だった。当日は、偶々中山先生が日本への紹介者でもあるヨーゼフ・シュンペーターについての講義で、さすがに熱が人ってなかなか終わらず終業のベルが鳴ってしまった。先生に「昨夜お電話をした者ですが」と申し上げると「君か、すまん、すまん」と言って足早に去って行かれた。

シュンペーターの創造的破壊について次のように話されたのが記憶に残っている。

「馬車を何台つないでも汽車にはならない。多数の貨車を連結して、馬力を機関車のエンジンに代える、この新結合がイノベーションである。」

シュンペーターのイノベーションによる経済社会の革新という考えは、マルクスの言う資本家が相対的剰余価値の拡大を求めて絶えず生産過程の合理化をはかろうとするという考えと底流では共通するものがあるのではないかと思った。

都留貢人先生（1912-2006）、佐藤定幸先生（1925-2015）

都留先生は当時経済研究所に属され学部での授業は無かったが、雑誌「マンスリー・レビュー」の勉強会をやろうと提案いただいた。これは高校の時に知ったレオ・ヒューバーマン達が編集発行しているアメリカの左翼グループの機関誌である。このグループで、ヒューバーマンの同僚でもあった、経済学者 ポール・スウィージー（1910-2004）は先生が戦前ハーバード大学に留学されていた時の学友だった。（都留先生は八高時代に運動を行って退学になり渡米してハーバード大学で経済学の博士号を取得。日米開戦に日米交換船で帰国されたというご経歴の持ち主である。）

早速アメリカから雑誌を取り寄せてほぼ月に一回勉強会を開いた。都留先生がご多忙となってから佐藤定幸先生にご指導いただいた。

高校時代に勉強したレオ・ヒューバーマンに大学でも接点が出来たことは

驚きでもあり喜びであった。その後会社に入って70年代にNYに赴任したが、書店の店頭で「マンスリー・レビュー」誌を見かけてまるで昔の恋人に会ったような気がしたものである。大学の図書館で調べてもらったら、今も後継者によって刊行が続けられていることが分かった。彼らは一貫して誌面を通してアメリカの独占金融資本批判と帝国主義的な対外政策の批判を続けてきた。その執拗で粘り強い行動には驚嘆するほかない。

学恩をいただいたのは上述の先生方に留まらない。今にして思うと同時代の最高の教授陣が揃っていたと思う。特に印象に残る先生方のご芳名のみ記させていただきます。

植田敏郎先生（ドイツ語）（1908-1992）、大畑末吉先生（ドイツ語）（1901-1978）、金子幸彦先生（ロシア語）（1912-1994）、山田欣一先生（現代数学）（1906-1974）、増田四郎先生（西洋経済史）（1908-1997）、高島善哉先生（社会科学入門）（1904-1990）、鈴木秀男先生（前期のゼミでマルクスの「ドイツイデオロギー」をテキストにご指導いただいた）（1921-2011）、増淵龍夫先生（中国史）（1916-1983）、氷原慶二先生（日本史）（1922-2004）、上原専祿先生（歴史学）（1990-1975）、山城章先生（経営学）（1908-1993）、米川伸一先生（社研のチューターとしてお世話になった）（1931-1990）。

授業に出ることに熱心でなかったことを本当に悔やむ。言い訳にはならないが、登校して来る学生が少なかった。当時ビラを作成し国立の玄関で朝から待機してビラを配布したものだが、100枚もあれば十分で150枚では余った。学期末試験の時にこんなに受講者が多かったのかと驚かされた。

卒論と就職

安保闘争の終了後から卒論と就活に取り組む。

卒論は「国家独占資本主義についての一考察」という表題で、東独の経済学者クルト・ツイシヤンクの著作「西独における投資金融の基本問題」を取り上げた。

今回卒業後初めて卒論を閲覧した。インクがもうかなり劣化していた。読み返してみて内容がお粗末なことを痛感させられた。ツイシヤンクは戦後の西独での企業の資金調達に戦前は金融機関主流だったのが、独占価格による高い収益による分厚い内部留保と株式の発行という自己金融が主流になっていると述べている。但し日本は銀行からの借り入れ（間接金融）が主流だった。この辺りの比較とその背後にある国家の役割が何かを解明しようとしたのだが中途半端な結果で終わっている。

就職先は労働価値説の信奉者であった私は、躊躇無く製造業を選択することとし、ある鉄鋼会社に就職。高度成長が始まっており就職をめぐる環境が良かったこともあるが、私のような者にも機会を与えてくれた会社の寛大な処置に今も感謝している。当然学生運動に打ち込んでいたことは会社も承知の上だった。学生の8割はデモに参加したという当時の社会情勢も背景にあると思う。

最後に

レオ・ヒューバーマンの本は1936年が初版だが、日本語訳が出版された1952年に、彼は日本版への序文を寄せている。

その一節から：

「私は今度の日本語訳の出版によって受けたような幸福を味わったことがない。何故なら、日本は世界の中で人類の未来が特筆大書されている部分であり、金の支配 (rule of gold))がついに黄金律法 (golden rule)によっておきかえられるべき部分だからである。

(注：黄金律法とは、新約聖書のマタイ伝7・12にある「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしてあげなさい。これこそ律法と預言者である」というキリストの言葉を指す。)

今、世界はまさに「マネー資本主義」と言われる時代に入っている。実物経済では、十分な利潤が上げられないため、グローバルな金融市場でマネゲームによって利益を上げようとしている。実態経済を4倍も上回るマネーが世界を駆け巡り、バブルとその崩壊を繰り返し、アメリカに典型的に見られるように富が国民のほんの一握りの人に集中して、中間層が困窮化する現象が起きている。ヒューバーマンはマネーの支配する社会から、黄金律の行き渡る社会を実現する国で日本が一番近い所にある国かもしれないと言っている。

東日本大震災の時に、互助の精神で助け合う日本人を見て世界は驚いた。60年以上前の予言だが、日本には「黄金律」の行き渡る社会を創り出せる可能性が十分にあると思う。そのためには、60年安保闘争を含めて戦後70年で培って来た「戦争をしない国」「世界中どこの紛争にも武器を供与していない国」というブランドを守ることだと思う。(終わり)

天のわざ、地のほまれ

—地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

30. 温度と熱

世の中には、われわれ現代人の日常生活において馴染み深く、そのすべてを把握していると思われるものでも、あらためて「それは何」と問われると途端に思考が混乱して曖昧になり、返答に窮するようなものがある。たとえば「熱」と「温度」である。一般に、物が熱を吸収すればその温度は高くなる。熱と温度が同一視できるようなものなら物事は単純明快である。しかしながら、鉄はすこし温めるだけで温度がすぐに上がるが、水は鉄にくらべれば、温めてもなかなかその温度があがらない。熱と温度は、おたがいに関連はあっても物質によってそれぞれ異なる、どうやら根本的に違うものらしい。

風呂の湯の温度は40℃前後が適温であって、もし50℃の湯に浸かればひどい火傷を負うことになる。一方、サウナの室内温度は100℃に近いが、火傷することはない(*)。つまり、人体にダメージを与えるのは、皮膚に接

触する物質の‘温度’では必ずしもない。熱なのだ。熱は一種のエネルギーである。木片をこすり合わせると熱(摩擦熱)が発生し発火することもある。また電熱線に電流を流すことによって電気エネルギーを熱に変えることができる。たまたま何らかのエネルギーが、熱という形をとっているだけのことである。熱は常に温度の高い方から低い方に流れる。熱がひとりで温度の低い方から高い方に流れることなど決してない。熱は別のかたちのエネルギーに変換することが可能である。たとえば、熱を持続的な動力に変換し蒸気機関車を走らせることができる。また、化石燃料を燃焼させ発電すること、つまり、電気エネルギーに変換することができる。

熱という得体のしれないものの正体は、古代ギリシャのヘラクレイトスの時代(BC 500 年頃)から 19 世紀に至ってもなお捉えきれず曖昧なままであった。「近代化学の父」と称される A. ラヴォアジエ (1743-1794) や原子論を提唱した J. ドルトン (1766-1844) らは、熱は「カロリック(熱素)」という一種の元素であり、熱素が物質に入りこむことによって熱を持つと考えた。しかし、密閉した室内で物質をこすりあわせるだけで、いくらでも熱を発生させることができるが、その源が熱素であるとしたら、大量の熱素はどこからやってくるのか。後に ラヴォアジエ は熱の熱素説を捨てたらしいが、自著に記載されている元素表には熱素が元素として記されているとのことである。

ちなみに熱を加えて物を燃焼させる際に炎が上がる。炎とはいったい何であるか。当時、燃焼は「フロギストン(燃素)」という物質が炎となって放出されることにより起こると、広く信じられていたという。万有引力定数を精密な実験によって決定した H. キャベンディッシュ (1731-1810) は水素の発見者としてもよく知られているが、かれは水素がまさにフロギストンそのものであると考えていたそうである。1774 年、J. プリーストリー (1733-1804) が酸素を発見し、燃焼は(炎が出ない場合でも)酸素による物質の酸化現象であることがわかり、フロギストン説は衰退していったのだが、プリーストリー自身はフロギストン説の熱心な支持者であったらしい。

一方、G. ガリレイをはじめとして、A. ニュートン、R. デカルト、R. ボイル、H. キャベンディッシュも、原子や分子についてその存在すらわかっていない時代にあって「**熱は物質の構成微粒子の運動によって発生する**」と考えた。たとえば、水を攪拌することにより、水の構成微粒子(H_2O 分子)の運動を活発にし、熱を発生させることができるであろう。

水温 15°C で、水 1 グラムの温度を 1°C 上げるのに必要な熱量を 1 カロリーという。熱量‘カロリー’は力学的な仕事量‘ジュール’に換算できる。1 カロリーあたりの仕事量(ジュール)を熱の仕事当量といい、物理学研究者は

$$1 \text{ カロリー (cal)} = 4.1855 \text{ ジュール (J)}$$

として熱の仕事量を計算することになっている。

英国の物理学者ジェームズ・P・ジュール(1818-1889)は、家業の醸造業を営みながら、40 年にもわたって熱の仕事当量の測定をおこなったのだ。かれが製作した装置は、水中で羽根車を回転させて攪拌することにより、水中で

熱を発生させ、上昇した水温を測定しようというものであった。羽根車は、紐(絹糸)を通じて外部のふたつの錘に繋がられている。錘が地球の重力によって引き下げられる仕事量が、そのまま羽根車の仕事量になるようにセットする。

しかしながら、ジュールが行った実験は、たいへん手間がかかり、得られた数値は一定せず、かなり大きな誤差が生じた。羽根車がした仕事のロスを抑えたとしても、水中に生じた熱はたちまち散逸してしまう。手早く注意深い精密実験が要求されるのである。以後、熱の仕事当量をJ値とよぶことにしよう。その単位は〔ジュール/カロリー〕である。1845年にかれが得たJ値は4.79であった。2年後、1847年の測定では、 $J = 4.207$ になった。その後すぐ、かれは水を鯨油にかえてみて、 $J = 4.210$ を得た。1850年には、水のかわりに水銀を使ってみたところ、 $J = 4.167$ となった(**)。

ジュールは、いずれの大学や研究機関にも属さないアマチュア研究者であった。学校で正規の教育を受けておらず、学界ではまさに一匹オオカミであった。1840年には電力に関する基本的法則：ジュールの法則(***)を発見していたにもかかわらず、アカデミックな後ろ盾がないために、学会ではあまり敬意を払われることはなかったらしい。この世には不思議なことに、あるとき天啓を受け、キャベンディッシュもそうだが、結果が公表されようがされまいが、ひとに受け入れられようが拒否されようが、天命に従ってひたすら信ずる方向に驀進するという人たちがいるのであろう。われわれは、こういう人たちからも大きな恩恵を受けているのだ。

ジュールはJ値の確定こそ自然科学発展のためのもっとも重要なブレークスルーになると考えていたにちがいない。自邸の一角に研究室を建て、広く自然科学の研究を続けていた。実験が困難であることに加えて、当時はまだ、エネルギーの単位が統一されていなかった。今でこそ仕事(エネルギー)の単位は、かれの業績を称えてジュールに統一されているが、かれは、仕事の単位としてフィート・ポンド(ft・pd)で計算していたのである。かれが得た数値をすべて現代的にジュールに換算したものがここに記している数値なのである。

あるとき英国の熱(力)学の泰斗ウィリアム・トムソン(1824-1907)がジュールの研究にたいへん興味をおぼえ、かれは学界で孤立しがちなジュールに手を差し伸べたのだ。幸いにもふたりは意気投合して協同研究をはじめたのであった。1852年には、**ジュール・トムソン効果**(****)を発見した。トムソンはアイルランドの貴族でケルビン卿としてもよく知られている。絶対温度の目盛ケルビン(K)は言うまでもなくかれの名にちなんでいる。

その後、家業の醸造業が破産しほとんど無一文になってからも、ジュールの研究への執念はとどまることを知らず、電流による発熱や鉄の摩擦による発熱量を測り、J値の確定のために努力をつづけたのであった。

ところが、熱がエネルギーの一種であることが確定したので、なにも熱を測る単位カロリーに執着する必要がなくなったのだ。熱化学会では、 $J = 4.184$ 、国際蒸気表では $J = 4.1868$ 、食品化学会では $J = 4.18605$ を使うことにして未だに統一的なJ値は確定していない。このようなわけでエネルギーの単位ジュールさえ確定しておけば良いので、最近では熱エネルギーの単位

として、カロリーを使わない傾向にある。物理学では、ほとんどの場合カロリーは使わず、ジュールに統一しようとしている。さらに食品の熱量はキロカロリーで示されることが多いので、なにかとまぎらわしいのだ。

一般に 1 g の物体の温度を 1 K だけ上昇させるのに必要な熱量を比熱という。比熱の単位は [J/g・K] である。したがって水の比熱は 4.1855 ということになる。理科年表で、いくつかの物質の比熱を見てみると、氷の比熱は 2.1 となっており、水の約 1/2 である。つまり、同じ量の氷と水に同じ熱量を加えれば、氷の温度の方が水よりも 2 倍のスピードで上昇するということである。鉄の比熱は 0.44 であるから、鉄は水の 10 倍ほど熱しやすく冷めやすいことがわかる。なお気体の比熱については次回にあらためて考えよう。

(*) サウナは熱気浴とも蒸気浴ともいわれるが、室内の湿度は 10% 以下に保たれているらしい。空気は密度も低く、内部に溜め込む熱(容)量は、水に比べて圧倒的に小さいので、空気の温度が高くとも熱エネルギーとしては、たいしたことはないのだ。水蒸気を多く発生させるミスト・サウナは室内の湿度を高めるため、温度は低め 40 - 50℃ に設定するそうである。

(**) 西條敏美「物理定数とは何か」(講談社 BLUE BACKS)に記されている数値を引用した。

(***) 電気抵抗 R を持つ物質に、電流 I を流したときに発生する熱量 Q は、

$$Q = R I^2$$

で与えられることを発見した。これをジュールの法則という。

(****) 気体を壁の細孔を通して一方から他方に移動させた時、移動後の気体の温度が移動前に比べて下がる現象をジュール・トムソン効果という。理想気体については、温度変化はない。つまり、気体分子間の力が、この現象に関わっている。条件によっては移動後のほうが、温度が上がる場合もある。ジュール・トムソン効果は、冷却器などに応用され、現代人はエアコンなどにより、大きな恩恵をこうむっている。

歴史文化論の試み(1)

尾関 陽四

森 有正のこと

私の本棚から、『森有正全集 全 14 巻+補巻+対話篇 2 巻 全 17 巻』を求めていかれた方がいる。感慨ひとしおだ。この機会に、森 有正について、覚えていることを記しておこう。

森 有正(1911 年-1976 年)は、明治政府の文部大臣を勤めた森 有礼(もり・ありのり)の確か孫にあたる。(以後、「確か」とか「らしい」とかいうことばが頻出するが、その理由は後ほど述べる。)

彼は東京大学を出て、母校の確か文学部フランス文学科で教鞭をとりつつ、デカルト・パスカルの哲学の研究を行っていた。その過程で、エリート学者の通例通り、フランスに留学することになる（1950年）。確か助教授の時だった。ところが、フランスに留学した彼は、留学期限が過ぎても、日本に帰らなかった。日本には、確か奥さんと娘さんを残したまま、彼は、フランスに留まった。やがて、彼は東京大学助教授を辞職するか除籍されるかして、文字通り、フランスで一人生活することになる。以後、高名なフランス哲学者としては気に染まぬような仕事で糊口を塗すこともあったらしい。

そして、10年が経過した。この間に彼の書き溜めた手紙と日記が少しずつ発表されて、森 有正の名がわが国に甦った。『バビロンの流れのほとりにて』『流れのほとりにて』『城門のかたわらにて』などの著作である。これらの著作は、哲学者のものと見ると物足りないところがあるが、異国で一人生活しながら思索を紡いだ結果と見れば、新鮮な驚きを呼び覚ますものであった。わが国の読書界は森 有正を歓迎した。

こうして、わが国の読書界に確固たる地歩を築いた森 有正は、短期間の日本への帰国を重ねるようになる。1960年代のこと。それに合わせて、雑誌『展望』などに感想を寄稿するようになる。『遙かなノートル・ダム』『旅の空の下で』『木々は光を浴びて』『遠ざかるノートル・ダム』などにまとめられた著作である。私が森 有正に関心を寄せ始めたのはこの頃のことだ。これらの著作は、前記の日記の延長線上にあるものであり、とくに、生活者の「経験」と「感覚」を重視する点が共通している。

以後も、短期間の日本帰国を重ねるとともに、日本の大学に奉職する話も具体化していたらしい。しかし、それが実現する前に、フランスで帰らぬ身となった。実に、フランス滞在 26年に及んだ。

森 有正の死後まもなくして、彼の全集が編まれた（1978年-1982年）。全14巻＋補巻のもので、彼の著作のほぼすべてに加え、未発表の日記も発表された。ところが、この全集には不思議なことが一つある。それは、「年譜」がないのだ。通常個人全集では、詳細な「年譜」が付いていて、それにより、その人の生涯をたどれるのだが、森 有正の全集には「年譜」がない。

もともと、その行動からも推測できるように、森 有正には、自己神秘化（ミステイフィケーション）の趣きが少なからずあり、彼は、自己の個人的な事柄を公にすることを極端に嫌ったらしい。フランスに渡って日本に帰らない理由も口を閉ざしたままだ。おそらく、晩年になって、個人全集の話が出版社から持ち上がった際に、「年譜」を付けないことを森 有正が希望したか、条件にしたか、したのだろう。

森 有正に関する著作をものにした木下順二・佐古純一郎・二宮正之・杉本春生・辻 邦夫・栃折久美子なども、揃って、森 有正の伝記的事実には目を向けていない。初めに、森 有正の伝記的事実について、「確か」だとか「らしい」とかいう表現が多くなると述べたのは、森 有正の「年譜」がないのがそ

の理由である。

さて、森 有正は、晩年になって、知人に、「（デカルトかパスカルかの）研究の決定版を書き終えた。まもなく印刷に回せるだろう。」と話していたそう。ところが、彼の死後、遺稿などを整理しても、デカルトもパスカルもどこにも見当たらなかったという。どうやら、森 有正一流の虚言癖で、周りは煙に巻かれたらしい。

『森有正全集 全 14 巻＋補巻』は現在絶版だが、『森有正エッセー集成全 5 巻』がちくま学芸文庫に収録されている。これは、1950 年にフランスに渡って以降の著作・日記・書簡を編集したものである。ところが、こちらも絶版らしい。

（２）復活のきっかけ

その後、私の本棚から、『森有正全集 全 14 巻＋補巻』がさらに 1 セット、『森有正エッセー集成 全 5 巻』も飛び立っていった。異様なほどの森 有正フィーバーだ。何か訳があるのだろうか？

インターネットで「森 有正」を検索してみると、思わぬことに突き当たった。今年（2009 年）9 月に、NHK 教育テレビの「NHK 知る楽－こだわり人物伝」という番組で、『世界の中心で、愛をさけぶ』の作者・片山恭一氏が、森有正のことを 4 回にわたって話したらしい。私は、このところ、新聞を購読していないので、テレビで森 有正が取り上げられていることを知らなかった。どうやら、この番組が、「遅れてきた森 有正フィーバー」の源のようだ。それにしても、「片山恭一氏、恐るべし」、だ。

前回、森有正全集に「年譜」がない不思議を述べたが、同じインターネット検索で、「CHEZ TAKAHASHI 高橋サンち」というホームページに出会い、その中で、「森有正略年譜」をまとめられているのを発見した。印刷したところ、7 ページにわたる労作である。「CHEZ TAKAHASHI 高橋サンち」のご主人も、私と同じく、森有正全集に「年譜」がないことにいらだち、自分で「森有正略年譜」を作成することを試みられたのだろう。

それで、森 有正の伝記的事実が明らかになった。前回の私の記述に誤りや不十分な個所があることがわかったが、幸いなことに、「確か」とか「らしい」とか、確認できない事実はあいまいな表現にしておいたので、文章全般を書き直す必要はなさそう。改めて、「CHEZ TAKAHASHI 高橋サンち」のご主人にお礼を述べたい。

森 有正を論ずる著作では、海老坂 武『戦後思想の模索 森有正，加藤周一を読む』（1981 年、みすず書房）が面白かった。1950 年代から 1960 年代までの森の著作を読み込みながら、フランスと日本との間で格闘する知識人の営みを活写している。森 有正と加藤周一との共通項は、いうまでもなく、

「留学体験」だ。森は留学先のフランスに留まる決意をし、加藤は長い留学の末、日本に帰ることを決意する。二人の結論の相違がどこからくるか、という点を海老坂は論じている。

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（26）

大竹 漢州

洛中洛外3・東寺（その2）

京都タワーに並ぶ五重塔は、広い庭が続く境内の東南の角にたっています。満開の桜越しに見える五重塔の姿には 風雪に耐えてきた風格を感じさせてくれます。空海は講堂の後に、更に五重塔の建立の大事業に取り組みました。しかし事業は始まりましたが、費用 も人でも全く足りません。ここで空海は、自ら東山を歩きまわり、五重塔の木材に適した硬木を探し出しました。朝廷に対して 「東寺の塔を造り奉る材木を曳き運ぶ 勸進の表」を提出したのが天長3年（826年）、この勸進が朝廷に受理され、大事業が清々と開始され、今日にできる 55m の高さをもつ日本一の塔が建立される目処が立ちました。

余談です。京都の建築基準に高さ制限を設けています。景観を考慮して東寺の五重塔の高さを越える事は許可されません。

しかし、空海の努力にもかかわらず、五重塔が建立されたのは9世紀末です。空海は完成した姿を目にすることはできません。空海の死後も弟子たちの手に引き継がれて完成しています。本来、五重塔の塔は、仏陀の遺骨を安置した仏塔（ストウーパ）に由来しています。東寺の五重塔には空海が唐から持ち帰った仏舎利（仏陀の遺骨）が納められています。

この五重塔には、過去落雷に見舞われて、四度火災にあっています。その度に、空海と同じように多くの僧侶が奔走し、再建に努力してきました。今日の五重塔は、初代から教えて五代目です。寛永21年（1644年）に再建されています。徳川家光の寄進で建立されています。徳川幕府の歴代の将軍は信仰深かったと共に、草創期には財力も豊かであったに違いありません。

五重塔の内部を見ることは通常不可能です。京都の寺院では、観光客の少ない冬季には、特別公開で秘仏や非公開の襖絵・茶室・方丈が見られます。旅人夫婦も東寺が特別公開した冬に訪れて五重塔の初層向部と塔頭をみる機会がありました。五重塔の初層には、極彩色に彩られた曇茶羅の世界が創り出されていました。各層を貫いた心柱を須弥壇として見立て「大日如来」を中心に、金剛界四仏像・八大菩薩像を安置しています。東面には阿閼如来・弥勒菩薩・金剛藏菩薩、南面には宝生如来・除蓋障菩薩・虚空藏菩薩、西面には、阿弥陀如来・文殊菩薩・観音菩薩、北面には不空成就如来・普賢菩薩・地蔵菩薩が安置されていました。

多くの仏像と菩薩に混じって、日頃から親しみのある観音菩薩，地蔵菩薩も安置されています。難しい曇茶羅の世界にあって、何故か？東寺の強い緊張した空気から解放された一瞬でした。

塔内の壁面には、真言密教を相承した八人の祖師である「真言八祖像」が描

かれています。即ち「大日如来」「金剛薩埵」「竜猛」「金剛智」「不空」「恵果」「空海」の八人です。

余談です。「真言宗」とは、歴史上の釈迦牟尼を超えた永遠の宇宙仏として考えた「大日如来」・この仏こそが「真実の仏」であるとし、大日経・金剛頂経などを所存の教説としています。胎蔵界曇茶羅・金剛界曼荼羅の両部を立てて「六大(方物を構成する六つの要素・地・水・火・風・空・識、密教で葉法身大日如来の象徴)」「四曼(四種曼荼羅の略)」「三密(密教で仏の身・口・意の働きを言う、人間の思議の及ばないところを密という)」などの説により、即身成仏を目的とする宗派です。

余談の余談です。「大日如来」は梵語で「摩訶盧遮那仏」です。宇宙と一体と考えられ、汎神論的な密教の教主です。大日経・金剛頂経の中心的な尊格で、その光明が遍く照らすところから「遍照」または「大日」と言う。「大日如来」は「遍照如来」「遮那教主」とも言われます。

突然のことですが「不動明王」についても触れておかなければなりません。「不動明王」は梵語で“動かざる尊者の意”です。「五大明王」「八大明王」の一仏です。「大日如来」の使者として登場し、やがて「大日如来」が教化し難い衆生(多くの生き物・多くの人々)を救うために、忿怒の姿を仮に現した仏です。

大伽藍が立ち並ぶ境内の北西の一角に仏堂、即ち大師のお住まいであった処が「御影堂(大師堂)」です。大師は「御影堂」で講堂の立体曇茶羅の構想をして造営の指革をとりました。御影堂の建物は、後堂(不動明王像)・前堂(弘法大師像)・中門で構成され、軒下まわりは垂木、屋根は桧皮葺で、建具は葺戸・妻戸を巡らす落ち着きのある建物です。空海の念持仏は「不動明王」でした。何故に「不動明王」を余談で話したか?ご理解いただけますね。しかし念持仏のお姿を誰もお見かけしたことはありません。空海は、即身成仏です。「不動明王」は、常に仏の空海の側にいます。御宝前で護摩を焚くと、燃え盛る炎の中から「不動明王」の化身が湧き上がってくるそうです。

広い境内を歩きまわり、少々疲れましたが、悦子と池畔のベンチに膝掛けて休みながら、弘法大師空海の生涯を思い浮かべました。司馬遼太郎先生の著「空海の風景」も読んで空海の生い立ちや思想背景について、ある程度理解していましたが、疑問に感じていたことが一つありました。何故、弘法大師空海は平安京に自ら体系化した真言密教を広めようとしたのか、皇族や貴族に取り入れられようとしたのか?天台宗祖伝教大師最澄との対抗意識か?平安京に遷都した桓武天皇、そして発展させた嵯峨天皇の生涯に影響していたのかもしれませんが。

後夜 仏法僧鳥を聞く 空海
閑林 独坐す 草堂の暁
三宝の声 一鳥に聞く
一鳥の声あり 人心あり
静心雪水 俱に了々

旅人が吟じる詩吟の吟題でもあります。空海は他にも吟題として「いろは歌」があります。

文化講座・講演会

奈良興福寺文化講座 2017年8月10日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講

講演：「運慶の彫刻様式と意義一定朝様と比較して」

興福寺国宝館長 金子啓明

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」

興福寺貫首 多川俊映

会場：(学)文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

第85回 新三木会講演会のご案内

1、日時・会場 2017年8月17日(木)13:00-15:00 如水会館

2、演題と講師 『昭和史と私』 伊東 隆氏 近現代史研究家
東京大学名誉教授

3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com

TEL: 047-464-4063

フルネーム：一般・天地シニアネットワーク

会費：2000円 婦人1000円 学生無料

茶話会：15:15-14:20 千円(自由参加)

4. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

5. 予告

● 9/21(木) 第86回 鈴木興太郎氏 一橋大学・早稲田大学名誉教授
『血の通った経済学を求めて』

● 10/19(木) 第87回 小宮山宏 三菱総研理事長 元東京大学総長
『プラチナ社会への技術革新』

事務局

<事務所までの道のり>

場所：〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号

(電話・FAX 番号：03-3837-0290)

御徒町界隈では、JR 山手線・京浜東北線と昭和通りが南北に並行して走っています。

- ① JR 御徒町駅北口を出てすぐ右に折れて、2ブロック直進すると、昭和通りに出ます。右に多慶屋の紫色のビルを見てさらに8ブロックほど直進すると、
- ② 都営大江戸線の新御徒町駅のA2入口が右側にあります。やや進むと(都営大江戸線の新御徒町駅A2入口を出た場合は右に回ると)、佐竹商店街のアーケードがあります。右折してアーケードを7ブロックほど直進すると、佐竹商店街の出口に到達します。そこを右に曲がってしばらく行くと、左側に薄青いビルがあります。(1階は焼肉屋「もとやま」。)そのビルの2階です。

<投稿歓迎><図書のおすすめ依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくだされば送りします。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますのでご了承ください。

<振込先> 三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・453号

● 発行：2017年7月31日

● 天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室
TEL・FAX 03-3837-0290
E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp